共済だより レター
2018年3月号 vol.120

エンジョイ！ 世界各国 子育て

スウェーデン

スウェーデン語以外の母国語を持つ子どもたちへの教育支援制度

(Chieko Yahagi Lundberg)
ストックホルム在住ライター 矢作ルンドベリ智恵子

スウェーデンでは、外国から来た移民の子どもや、家庭でスウェーデン語以外の言語を話す子どものために、母国語教育が行われています。この教育は、コミューンという、日本でいう市区町村に該当する基礎的自治体によって運営が実施されています。母国語教育は義務ではなく、希望者のみが受けられるという制度です。各自治体によって授業を受けられる年齢や最少人数の枠なども決まっていますが、条件に達すれば無料で授業を受けることができます。

なぜこの制度が始まったのか？

スウェーデンでは、人口の約20％が移民のバックグラウンドを持っており、少なくとも100以上の母国語が使われています。ここでいう移民は、外国生まれの人、もしくは国内で産まれているが、両親が外国生まれの人たちです。スウェーデンは歴史的にみても、移民・難民の受け入れには寛容な国でした。深刻な労働不足だった1950年から60年代にかけては、ヨーロッパ諸国から多くの外国人労働者がスウェーデンに出稼ぎにやってきました。この頃から、スウェーデン語を母国語としない人たちが増え始め、母国語教室がスタートしたのです。

© Image Bank Sweden, Ann-Sofi Rosenkvist

スウェーデンの幼児教育は1歳から始まり、日本でいう保育園のような就学前学校は、1歳から5歳の子どもたちが通っています。ここでは、すべての子どもたちがスウェーデン語と母国語の両方を発展できる機会が与えられています。

さらには、彼らの文化的なアイデンティティを発達させる機会も与えられています。母国語をしっかり学んでいくことで、スウェーデン語の習得や、他の分野の知識をより深めることができるようになります。よって、母国語教育は、これらの言語を比較したり、文化的なアイデンティティを強化したりするために重要と考えられています。

私の息子たちも、小学校から高校2年生まで母国語授業を受けていました。普段は、私としか日本語を話さない子どもたちも、両親、もしくは親のどちらかが日本語を話す子どもたち数人と一緒に、週に1回、日本語を学ぶことができました。言葉だけでなく、日本の文化、歴史、社会なども学ぶことができ、彼らの人格を形成するうえで、とても良い機会だったと思います。学期ごとにさまざまなテーマに基づいて日本語で調べたり、文章をまとめたり、日本や日本語に対する知識を深めるのに役立ったようです。

ボートシュルカ自治体の例

ストックホルム郊外にあるボートシュルカ自治体は、多くの移民が住んでいる自治体の一つです。この自治体では、4歳から母国語を学ぶことができます。

この自治体のある学校には、570人の生徒中、292人が母国語を持っています。学校の科目の一つには母国語の授業があり、小学校から高校教育のカリキュラムに含まれています。もし、生徒の学力が一定の水準に達しないリスクがある場合は、母国語でサポートを受けることができます。

© Image Bank Sweden, Simon Paulin